

令和4（2022）年度 相愛中学校・高等学校「学校評価」

1. めざす学校像

相愛中学校・高等学校は、仏教とくに浄土真宗のみ教えに根ざした女子教育を教育の柱とし、130年をこえる歴史を経ても、建学の精神である『當相敬愛』を見失うことなく、「自利利他」と「共生」の思い、知性と教養、品格を備えた女性を育成し、社会に多くの有為な人材を輩出してきた。しかしながら、ますます激化する私学間競争に生き残り、本校が発展的に存続していくためには、他校にはない独自性を社会および本校のステークホルダーに対して魅力的に発信し、信頼を獲得していくことが必要である。

昨今、少子化問題、超高齢化問題など、社会を取り巻くさまざまな課題が取りあげられているなかで、インターネットの普及やAIの発展など、社会構造のグローバル化がいつそう加速化し、人の社会的関係性、役割など私たちの身近な環境が大きく変化しつつある。これからの社会においては、人と人とのつながりに“響感”する豊かな感受性を原動力として、新たな社会を創造し、その形成に主体的行動力をもって寄与していく女性の活躍がますます求められることは間違いない。長年にわたり、女子教育を担ってきた本校だからこそ、次世代のグローバル社会を見据え、キャリアデザイン能力を伸ばす女子教育の重要性をあらためて感じている。

このことを踏まえ、今後の教育ビジョンとして、『當相敬愛』の精神に根ざした「自利利他」と「共生」という仏教の教えの本質を主体的に、そしてアクティブに探求することのできる学びと実践の環境を拡充、発展させていくことで、次世代の社会的ニーズに適合する「グローバル社会に貢献する女子のキャリアデザイン」の推進を図り、これを本校の特色ある教育活動として確立することをめざす。

2. 中期目標

本校の教育ビジョンを明確にすべく2018年度当初、「相愛中学校・高等学校第1次将来構想～その方針と推進方法」を土台として、具体的な教育ビジョンの策定に取り組むべく、将来構想委員会をスタートさせ、2019年に「相愛中学校・高等学校第1次将来構想」を策定した。第1次将来構想は、これからの社会に求められる人物像をいかに捉え、どのようにその育成をはかるかという点に重点を置き、当面（約5年間）取り組むべき課題について取りまとめている。今後の教育活動の方向性としては、2015年に国連サミットにおいて採択、スタートした国連グローバル・コンパクト（UNG C）の取り組みに基づいた「持続可能な開発目標（SDGs：Sustainable Development Goals）」の推進を、建学の精神の具現化をはかる中期的な達成目標と位置づけ、その達成に向けた探求学習、課外行事などの活動内容を具体化させていくものである。

また、第1次将来構想では、以下に挙げる教育面の主な改革テーマに関して、具体的なビジョンを30項目にわたって示している。

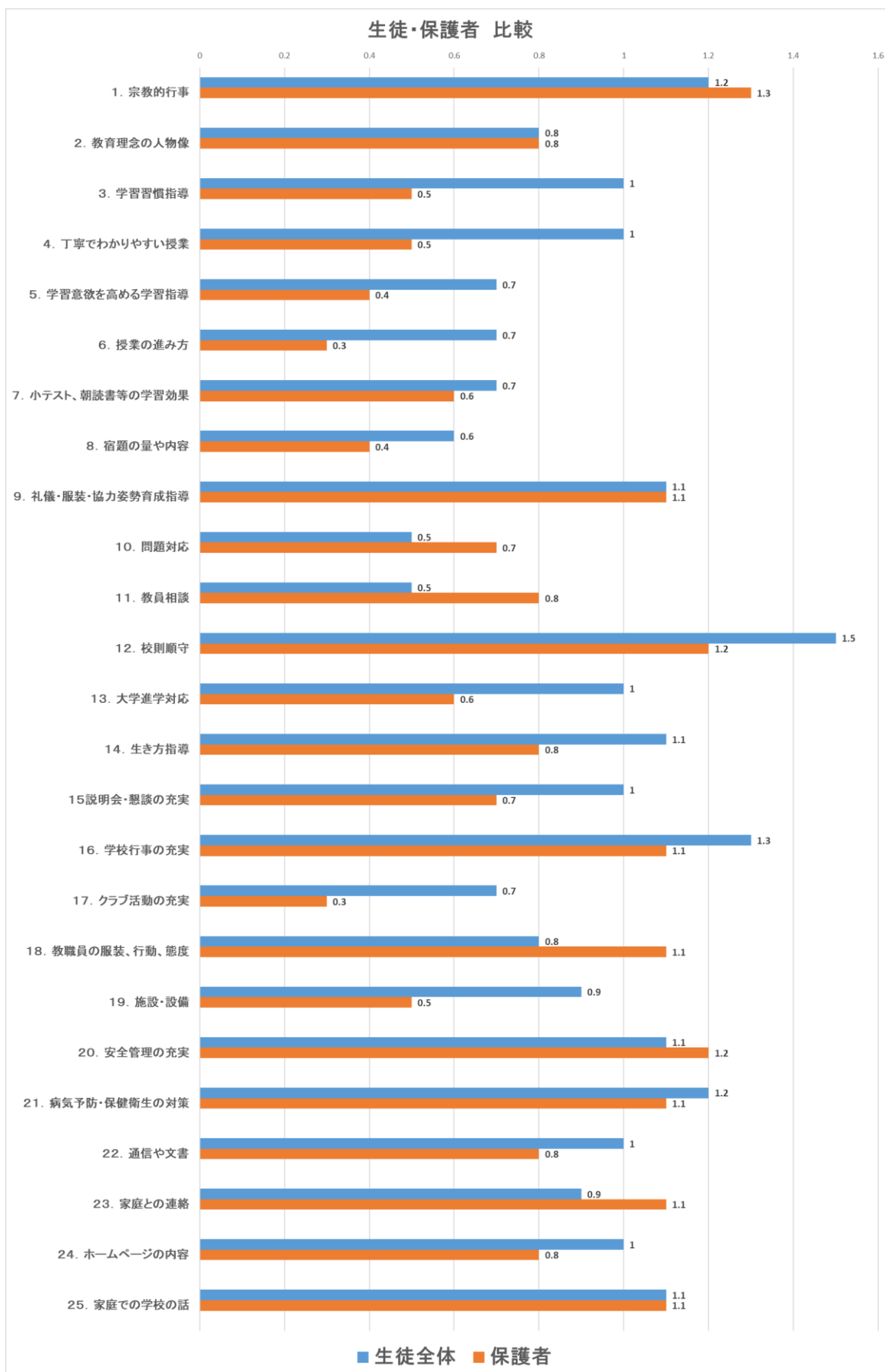
- ・教育の質(1) 建学の精神を具現化する教育活動の再構築
 - 1 本校の「独自性」の明確化
 - 2 「共生」と「自利利他」の視点に立脚した学校生活の確立
 - 3 建学の精神に即した学校行事、ロングホームルーム（LHR）など特別活動の展開
- ・教育の質(2) グローバル社会に貢献する女子のキャリアデザイン
 - 1 相愛独自のキャリア教育プログラムの構築
 - 2 地域社会への貢献活動の展開
 - 3 グローバル社会を見据えた国際交流プログラムの拡充と留学制度の見直し
 - 4 高大連携の拡大によるキャリアサポートの深化
- ・教育力 教育行政の変革をふまえた教育活動の高度化
 - 1 教育行政の変革をふまえた中学・高校カリキュラムの総合的な見直し
 - 2 中学・高校における各コースの特性と状況に応じた教育展開と教科指導の改善
 - 3 高大接続改革に伴うICT教育の推進

3. 学校評価アンケートの結果と分析・学校評価委員会からの意見

学校評価アンケートの結果と分析 [2023 年1月実施]	学校関係者評価委員会からの意見 [2023 年 9 月 13 日実施]
2022（令和4）年度よりアンケート調査を外部委託から学内実施へと変更したことに伴い、それぞれの質問項目について、2021（令和3）年度までの「とてもあてはまる」「あてはまる」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」「わからない」という、客観的な要素を含む「評価」を回答するものから、「とても満足している」「満足している」「あまり満足していない」「満足していない」「わからない」という、回答者の主観的な「満足度」を聞く回答の選択肢へと変更した。 この変更により、過去年度からの評価の推移を考察することは困難となったため、今年度については各項目における満足度や他項目との相違、生徒と保護者との満足度の相違について分析・考察した。 分析方法については、各質問項目の回答を： 「とても満足している」・・・・・・3点 「満足している」・・・・・・1点 「あまり満足していない」・・・・・・1点 「満足していない」・・・・・・3点 「わからない」・・・・・・0点 と点数化し、全回答者、あるいは学年ごとの平均ポイントを算出した。 ※4ページのグラフ参照 【生徒】 ポイントが「1.0」以上で一定の評価が得られている項目は： 「1. 宗教的行事」→「1.2」 「2. 教育理念の人物像」→「1.0」 「9. 礼儀・服装・協力姿勢育成指導」→「1.1」 「12. 校則順守」→「1.5」 「13. 大学進学対応」→「1.0」 「14. 生き方指導」→「1.1」 「15. 説明会・懇談の充実」→「1」 「16. 学校行事の充実」→「1.3」 「20. 安全管理の充実」→「1.1」 「21. 病気予防・保健衛生の対策」→「1.2」 「22. 通信や文書」→「1.0」 「24. ホームページの内容」→「1.0」 「25. 家庭での学校の話」→「1.1」 ポイントが「0.5」未満の項目はなかったが、 「10. 問題対応」、「11. 教員相談」が「0.5」となっている。	（アンケート全体に関して） 【学習意欲を高める学習方法】 ・生徒と保護者の満足度に乖離が見られることに関して、保護者は学校がどのようなレベルで勉強を行っているかを、娘の返却されたテストの結果だけでは判断するのが難しいのかもしれない。 【授業の進め方】 ・中学特進コースでは長期休暇補習はあるが、もう少し補習授業等をしてもいいと思う。 【問題対応】 ・中学生の保護者は、教育熱心に子育てをしている家庭が多く、私立学校に期待することも大きい。生徒同士のトラブルがあった時には、初期対応に注意を払い、生徒のケアを行うのが良いと思う。 ・保護者は高校受験をさせない前提で中学受験をしている。「学力向上」あるいは「楽しい学校生活」を求めて私学に入れているので、その満足度を満たすように努めるのがいい。 【教員相談】 ・先生に相談にのって頂けることはありがたい。 【クラブ活動について】 ・クラブ活動について、何が不満なのか、具体的に部活数が少ないのか、やりたい事が少ないのか、既存しているクラブに何か不満があるのか、その要因を知りたい。

【保護者】 ポイントが「1.0」以上で一定の満足度が得られている項目は： 「1. 宗教的行事」→「1.3」 「9. 礼儀・服装・協力姿勢育成指導」→「1.1」 「12. 校則順守」→「1.2」 「13. 大学進学対応」→「1.0」 「14. 生き方指導」→「1.1」 「15. 説明会・懇談の充実」→「1.0」 「16. 学校行事の充実」→「1.1」 「18. 教職員の服装、行動、態度」→「1.1」 「20. 安全管理の充実」→「1.2」 「21. 病気予防・保健衛生の対策」→「1.1」 「22. 通信や文書」→「1.0」 「23. 家庭との連絡」→「1.1」 「25. 家庭での学校の話」→「1.1」 一方で、ポイントが「0.5」未満となっている項目は： 「5. 学習意欲を高める学習指導」→「0.4」 「6. 授業の進み方」→「0.3」 「8. 宿題の量や内容」→「0.4」 「17. クラブ活動の充実」→「0.3」 となっている。 【全体として】 「生徒・保護者」の二者比較では、「3. 学習習慣指導」、「4. 丁寧でわかりやすい授業」、「5. 学習意欲を高める学習指導」、「6. 授業の進み方」、「17. クラブ活動の充実」において、保護者の満足度が生徒よりも低く、その差が0.3以上となっている。一方で、「10. 問題対応」、「11. 教員相談」の2項目については保護者の満足度が生徒よりも高いものとなっている。 このような生徒と保護者の満足度に乖離がみられる項目については、その原因が何であるかを探り、教育の内部質保証を確保するとともに、生徒や保護者の学校満足度を向上させていく必要がある。また、生徒、保護者の満足度が低い項目はもちろん、すべての項目において、教育内容の改善をはかり、満足度を向上させていく必要がある。	
---	--

グラフ：学校評価アンケートにおける各項目の満足度ポイントの生徒、保護者比較



4. 本年度の取り組み内容および自己評価

今年度の重点目標	具体的な取組計画・内容	評価指標	自己評価
1. 将来構想の推進	2019年5月策定の「第1次将来構想」に基づき、「将来構想委員会」を計画的に開催（週1回）し、各部署が作成した「実施すべき活動にかかる計画書」の検証を継続。	将来構想委員会を計画的に開催しているか： 1. 「将来構想委員会」を年度当初より計画的に開催できたか。 2. 各種活動が実施できたか	目的や活動の明確化については将来構想委員会において推進を継続できている。 1. コロナ禍において、不定期となった期間もあったが、継続的に開催することができた。 2. 「実施すべき活動にかかる計画書」において掲げられた102の実施項目のうち、短期で実施可能な89項目の9割を超える81項目を実施するに至った。
2. SDGsに向けた取り組み	SDGsに向けた探究学習や課外活動、国際交流を通じた質の高い教育を推進する。	SDGsをコンセプトにした探究学習を各学年で定期的の実施できたか。	中1～高3まで全学的に探究学習を計画的に実施。 〈一例〉 企業（教育と探究社）が開発した課題解決アクティブラーニング・プログラム「ソーシャルチェンジ」に取り組み、身近な社会課題とSDGsをテーマに、その解決法を探究。 全国の龍谷総合学園加盟校の高校生を対象としたアクティブ・ラーニング夏期交流プログラム「仏教×SDGs」への参加。 校外活動として、大阪国際平和センター（ピースおおさか）との間で締結した平和教育に関する連携協定をもとに、高等学校音楽科の生徒たちが、同センターが主催する「終戦の日戦争犠牲者追悼式」平和コンサートに出演協力。 中学2年生の宿泊研修「オータムスクール」において、重度障がいにより外出困難者である従業員がロボットを遠隔操作しサービスを提供している『分身ロボットカフェ』を訪問し、当事者との対話を通じて障がい者と社会のつながりについて学んだほか、東京都教育委員会と大手企業が提供する体験型英語学習施設「TOKYO GLOBAL GATEWAY」を訪問し、グローバルな価値観と視野を広げることができた。

3. 建学の精神の具現化に関する事項	法要や宗教教育研修会の実施を始めとする宗教教育の充実をはかる。	宗教教育に関する各種研修会を年間行事として実施できたか。 宗教教育に関する取り組みに対して具体的成果が得られたか。	生徒、保護者および教職員を対象とした宗教教育研修会を年間行事に組入れ実施。 (一例) SDGsへの取り組みの一環として、発展途上国の飲み水問題の解決に取り組むソーシャルビジネスを展開している企業代表者から、生徒による水の浄化実験を交えながらの講演を聴講するなど、SDGsへの企業努力に仏教の教えを重ね合わせることで、「自利利他」や「共生」の社会実践の意義を生徒に気づかせることができた。 法要後に全生徒に法話感想文を提出させ、それらを取りまとめた冊子『響流十方』（第9号）を発行した。 千鳥ヶ淵全戦没者追悼法要にかかわる募集作文選考において、中学2年生の作文が最優秀作品に選出され、同法要での表彰並びに朗読の機会も得ることができた。同じく本願寺主催「全国児童生徒作品展」においても、2作品が特選（中学1年、2年）、3作品が入選（中学1年、中学3年2名）に選出されるなど、本校の宗教的情操の涵養に対する効果が表れる結果となった。
---------------------------	--	---	--

4. 教育活動の展開と充実に関する事項（続き）	（2）特色ある探究学習の展開 SDG s の推進をコンセプトとし、特色ある探究学習を展開する。	①計画的な探究学習ができたか。 ② 自己評価シート(ループリック)の導入ができたか。	『キャリア教育推進に向けた中期計画』に基づき、学年ごとの「年間目標」をもとに「年間指導計画」を作成することで、各教科における教育活動とキャリア教育を有機的に関連づけ、推進していくという方向性がより明確になり、教科間の横断的な協力関係を築きやすくなった。 生徒個人が、自身の学習の過程を記録するとともに、客観的な視点に立って自己評価をすることでより主体的な学びに対する理解を深めることができよう、『自己評価シート(ループリック)』の導入の検討を進めた。 2023（令和5）年度中に特定の学年を対象とした試験運用を開始し、引き続き、その内容について検討を行うこととしている。 マイクロソフト社アプリ「Teams」での授業の諸連絡や教材・資料の配付など、さまざまな機能の活用はこれまで以上に活発になった。 学習支援アプリ「MetaMoji Classroom」を試験導入した。教員と生徒、あるいは生徒同士で、課題の配付・提出、デジタル資料の閲覧、教材や画面の共有など、画面上で直感的かつ効率的に行うことができ、グループワークやプレゼンテーションが活性化だけでなく、教員と生徒の双方向のやり取りの効率化も図ることができた。 「スタディサプリ」のポートフォリオ機能を活用し、生徒自身が学習成果を入力、蓄積することで、学習活動の振り返りと気づきを促しただけでなく、教員による生徒の行動観察等も入力し、各教科担当がそれらを自己点検することで、指導の改善に役立てた。
	（3）ICT活用に関する学習の取り組み	具体的な取り組みができたか。	

5. 進路指導に関する事項	(1) 各コースにおける進路指導の展開 ①高校普通科特進コース 生徒個々の学習状況やレベルに応じた指導を徹底し、国公立大学や難関私立大学の合格率向上につなげる。 ②高校普通科専攻選択コース 生徒が希望する幅広い進路に応じて選択科目を履修できるカリキュラムで、大学合格率の向上をめざす。 (2) 進路ガイダンスの充実 (3) 併設大学への進学率の向上	大学合格率の向上に向けての取り組みとその効果が得られたか。 大学合格率の向上に向けての取り組みとその効果が得られたか。 日々の指導に加えて個別指導を強化できたか。 進路ガイダンスの実施充実ができたか。 相愛大学への進学率の改善（高校3年在籍数の20%を目標）が出来たか	2021（令和3）年度は大阪大学をはじめとする有名国公立大学の合格者を輩出した好実績を維持するために、年度当初より定期的に特進コース担当者会議を開催し、実績向上の一因である個別指導の強化とその方策や、各教科や各学年における指導計画や課題点を情報共有した。特進コースからの国公立大学進学者は、令和元年度2名（在籍12名）、令和2年度1名（在籍11名）、令和3年度4名（在籍9名、過年度生1名を含む）、令和4年度2名（在籍8名）となっており、有名国公立大学合格も連続で輩出することができている。 多くの生徒が学校推薦型選抜（指定校制）を利用して進学するが、近年は総合型選抜との併用や国公立大学進学希望者も出てきており、多種多様な進路指導が求められることから、担任主導が基本となる各生徒への個別指導にいても、進路指導部が状況に応じて直接的に関わりながらサポートをする協働体制を強化した。 2022（令和4）年度も国立大学合格者を輩出し、本コースにおいても難関大学への進学を志望する生徒が増加している。 中高6カ年の流れを意識したガイダンス計画を完成させ、生徒の進路意識の向上と将来を考えるきっかけの場を提供する土台を築くことができた。 高校での新たな取組みとして、1年生を対象に本校教員が各自の専門分野を活かして、大学での学びを紹介する大学ミニ動画講義を60本作成し、生徒各自に興味のある複数の講義を視聴させることで、これまで困難であった幅広い学問分野を知る機会を与え、既存のガイダンスの流れをより強固なものにすることができた。 音楽科は令和元年度の65%に対して、令和2年度47%、令和3年度47%と約半数の状態を維持してきたが、令和4年度は58%と向上した。
----------------------	---	---	--

5. 進路指導に関する事項（続き）	（3）併設大学への進学率の向上（続き）	相愛大学への進学率の改善（高校3年在籍数の20%を目標）ができたか。（続き）	普通科専攻選択コースは、数年前まではほぼ一桁台の進学率（平成27年度7%、平成28年度4%、平成29年度11%、平成30年度8%）、であったが、令和元年度15%、令和2年度19%、令和3年度14%と10%を超える進学率となり、令和4年度は10%と低下したが、進学率は依然として2ケタ台を保つことができ、進路指導の成果が現れた結果と言える。
6. 生徒指導に関する事項	（1）生徒対象 安全かつ健康な生活を目的としたサポート・指導のための講演会の実施 ① ネットリテラシー ② 思春期教育 ③ 歯科等健康に関する教育 ④ 交通安全に関する教育 ⑤ 「避難訓練」 （2）教職員対象 ① 救命講習 ② カウンセリング研修会 ③ 学外の公的協議会への参加 ④ その他	具体的な講演会等が実施できたか。 具体的な講演会等が実施できたか。	（1）生徒対象 以下の講演会を実施 ① 「ネットリテラシー講演」 ② 「思春期教育」 ③ 「歯科等健康に関する教育」 ④ 「交通安全に関する教育」 ⑤ 「避難訓練」 一部校舎の改築工事に伴い、従前とは異なる避難経路となるため、新たな避難経路を教職員が共有するとともに、訓練を通して冷静かつ安全な避難行動が行えるように努めた。 （2）教職員対象 ① 「救命講習」 大阪市中央消防署の協力を仰ぎ、AED使用・人工呼吸・心臓マッサージの研修を実施し、緊急時に備えた。 ② 「カウンセリング研修会」 本校スクールカウンセラー2名による、生徒へのアプローチ方法などに関する専門的な研修を3回実施し、教員の指導力・対応力のさらなる向上をめざした。 ③ 「学外の公的協議会への参加」 生活指導に関する学外の公的協議会に積極的に参加し、中学・高校が抱える問題について意見交換をし、情報収集したものを校内において共有することによって、日々の生徒指導につなげるとともに、その内容・方法を継続的に精査し、生徒一人ひとりに寄り添うきめ細やかな指導の確立を図った。 高気温時における生徒の熱中症対策としては、校庭の一部にミストシャワーを設置したほか、校内3カ所に飲料水サーバーを設置した。また『熱中症対策ガイドライン』策定に向けた検討を行った。

7. 入試広報・生徒募集に関する事項	(1) 広報活動の高度化 各種広報媒体を用いた広報活動、オープンスクール、学校訪問、ブース説明会等の生徒募集イベントの充実	生徒募集のための様々な工夫がなされ、イベント参加者数の増加ができたか。 生徒募集、広報活動に関するさまざまな取り組みが実施できたか。また成果が得られたか。	① 入試広報イベントの充実 オープンスクールにおいてSDGsや探究学習等、本校独自の教育内容をより親近感を伴って受験生に紹介する「トークライブ」では、教員、在校生、卒業生によるアットホームな雰囲気の中で対談が行われ、会場が参加者で満員となるなど人気のプログラムとなった。 ② 情報発信の強化 知名度を向上させるためのWEB広告等を、広報・情報センター事務室と連携を取り、有効な方策を検討して行った。 公式ホームページを介し、教育内容の発信や入試情報の提供を、積極的に行った。 新たなSNSとしてInstagramを導入し、相愛生の学校生活の様子を写真や短い動画で積極的に発信した結果、1万回以上再生されている動画もあり、ユーザー世代である受験生やその保護者への認知度向上において大きな可能性を感じる結果となった。 「LINEアカウント」を継続活用し、本校への接触者に対する様々な入試イベント情報を随時発信することで、本校に対する関心を継続させて出願・入学へとつなげた。 各種メディアからの取材依頼にも積極的に協力し、2022(令和4)年度は、テレビ番組の取材を4本、新聞記事の取材も11本(全て掲載済み)受けることができ、本校の知名度及び認知度向上につなげることができた。 学校訪問をする際の広報ツールとして、学校案内の内容をコンパクトにまとめた「ミニパンフレット」を別途作成し、生徒募集活動を強化する地域の中学3年女子生徒全員に配付した。その結果、本校オープンスクールの中学生の動員人数は、一昨年度比で130%以上、昨年度比でもほぼ100%をキープし、コロナ禍による動員人数の減少を抑えることができた。また外部の入試説明会についても、相談件数が前年度比200%以上の説明会が9回あり、「ミニパンフレット」は、本校の知名度及び認知度を向上させることに一定の効果があったと考える。
---------------------------	--	---	--